

かげろうの日記

堀辰雄

青空文庫

なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地するかげろふの日記といふべし。

蜻蛉日記

その一

半生も既に過ぎてしまつて、もはやこの世に何んのなす事もなく生きながらえている自分だが、——一たい顔かたちだつて人並でないし、これと云つた才能もあるわけではないのだから、こんな風にはかない暮しをしているのも尤ももつとの事だとは思ふもの、只こつやつてぼんやりと明し暮しているがままに、世の中に多い物語などをおりおり取り上げて、その端はしなどを読んで見ると、ずいぶん有り触れた空そらごと言ことさえ書いてあるようだから、自分の並々ならぬ身の上を日記につけて見たら、そんなものよりも反つて珍らしがつてくれる人もあるかも知れない。それにまた、世間の人々が、私のようにこんなに不ふ為あわ合せになつたのは、あまりにも女として思い上つていたためであろうかどうか、その例ためしにもするが好

いと思うのだ。

何分にももうすべて一昔も前の事なので、さて、何から書き出したら好いのだろうか知ら。まあ、それ以前の取るに足らない程の、好き事すきごとなんぞは、それはそれとして、——今からもう十何年前の、そう、たしか夏の初めだったと思う、その頃はまだ柏木かしわぎと呼ばれていたあの方が始めて私に御文をよこされたのである。その最初の時からして、あの方と云つたら外のお方とは変つたなされ方で、普通だったら下しもじもの女にでもその御文を届けさせようものを、あの方は役所で私の父に先ず真面目とも常談ともつかずほのに仄めかされて置いて、こちらでそれをどう思おうなんぞという事には少しもお構いなさらずに、或日、馬に乗つた男に御文を持って来させられた。その使いの者がまた使いの者で、「どなた様から」と訊きかせることも出来ない程、はしやぎ切つていたので、こちらの方ではしかたがなしにその御文を受取つてしまつてから、はじめてそれが柏木様からのものである事を知つたのだつた。が、見れば、御料紙なんぞもこういう折のになつたものではなかつたし、大層御立派だとお聞きしていた御手跡もこれはあの方のではないのではあるまいかと思われる程のものだつたし、どうもすべてが疑わしいので、御返事はどうしたものだろうかと

迷つていると、昔むかし氣質かたぎの父はしきりに恐縮がつて、「やはりお出しなさい」と私に無理やりにそれを書かせた。それをきつかけにして、それからあの方は屢しばしば私に同じような御文をおよこしになつたけれど、最初のうちは私の方ではそれほど熱心になれず、返事も出したり、出さなかつたりしていた位だった。

そう云つたごく通り一遍な消息をやりとりしているうちに、その夏も過ぎて、秋近くなつた頃、どうした事からだつたらうか、とうとう私はあの方をお通かよわせするようになった。そうしてその頃はといえば、あの方は何を措おかれても、殆ど毎夜のように私の許もとにお通いになつて入らしつたが、そのうちにやがて十月になつた。

その月半ば、私の父は陸奥むつのかみ守に任せられて奥州へ御下りにならねばならなかつた。——それはまだ、私があんまりあの方にもお馴れしても居らず、お会いしている時だつて、ただもうさしぐんでいるばかりだったのを、反つてあの方はいとしがられ、一生お前の事は忘れまいなどと御誓いなすつたりせられはしたものの、果して人の心なんぞは頼みになれるものやら、なんとも言えず不安で、自分の悲しい行末ばかりが思われてならないような日頃であつた。——とところで、いよいよ父たちが出立すべき日になつた。みんなが別れ

を惜しんでいる間に、父はふいと私のもとに入らして、御形見の硯すずりに何かお文のようなものを押し巻いて入れて、それからまた黙って出て往かれたようだったが、私はそれをすら見ようとせせずにいた。とうとう皆が出立した跡になって、私は少しためらいながら、それにいざり寄って、何だろうと開けて見ると、「君をのみたのむ旅なる心には行末とほく思ほゆるかな」と認めしたたられてあつた。見るべき人が見るようにと書き残されたのだろうと思つて、私は、それをそのまま元のように収めて置いた。それからしばらくして、あの方がお出いでになつたけれど、目も見合わさずに、私がじつと思ひ詰めたようにしていると、あの方は「こんな事は世に有りがちな事なのに、そんなに歎いてばかりおられるのは、わたしの事をちつとも頼みに思つていてくれないからなのだろう」と私を反つて恨むように言われるのだつた。が、そのうちに、ふと硯にあつた御文を見つけられ、それを御手に取られてお読み出しになつたかと思うと、しばらくの間それから御目をも放さずに、さもお気の毒なと言いたげなお顔をなすつていらした。……

その後、日の立つにつれて、そんな遠い旅空にある父の事を思いやるだけでさえ気がかりでならないのに、私がこうしてもういよいよあの方お一人にお頼りするより外はないようになればなるほど、何だかだんだんあの方の御深切がお口ほどでもないように思われて

くる一方で、その心細いことといったらなひのだった。

その明くる年の春から夏にかけて、私はずつと悩み暮らし、八月の末になつて道綱みちつなを生んだが、いまから思えば、まあその頃があの方あの方も私を一番何くれとなく深切になすつて下すつていた頃だったようだ。

ところが、その九月になつて、あの方がお出かけになられた跡に手筈てぼこが置いてあつたので、何の気なしに開けて見たら、どこかの女のもとへ送るおつもりだったらしい御文がしのばせられてあつた。私は驚いてどうしたら好いかもわからない位だったが、せめて自分がそれを見たとき云う事だけでもあの方に知らせてやりたいと、わざとそれをそのまま放つて置いた。しかし、あの方はそんな事には少しも気をお留めにならぬらしかつた。——そんな事があつてから、私はとても気になつてそれとはなしにあの方の御様子うかがを窺うかがつてゐると、或夕方、急に「どうしても往かなければならない所があるから」と仰おつしやつて出て往かれた御様子うかががどうも不審ふしんだったので、人を付けさせて見たら、果して坊まちの小路こうじのこれこれの所へおはいりになつたと云う事だった。——矢つ張やっばそうだったのかと、胸もつぶれるような思ひで、それからの数夜と云うもの、私は寐いも寐ねられず、しかしどうしようもなく一

人きりで歎き明かしていた。そんな或夜の明け方だった。誰か訪れて来たものがあるらしく、しきりに門を叩いているようだった。すぐあの方がいらしたのだとは分かったものの、私も少し意地になって、いつまでも戸を明けさせずにいた。やがて私の知らない間に、あの方はすすごお帰りになってしまわれたらしかった。おおかた小路の女の所へでも入らしたのだらうと思った。が、朝になって、何だかそのままにして置いても気になるし、それかと云って戸をちよつとお明けしなかつた間ぐらいはとも思うものだから、私は「歎きつつひとりぬる夜の明くるまはいかにひさしきものとかは知る」と、いつもよりか少しきつくろつた字で書いて、萎しおれかけた菊に挿してやった。すぐ御返事があつたが、「私だつてお前が戸を明けてくれるのを、夜の明けるまでだつて待つて見ようとしたのだ。が、折悪しく急ぎの使が来てしまったものだから——」と書いてあるぎりだった。いつもに変わらず、こちらがこれほどまでに切ない心もちをお訴えしているものを、あの方はさも事もなげにあしらわれようとしかなさらないのだ。どうしてそんな女の事なんぞを私にもつと出来るだけお隠しなすつて、いま暫くなり、「内裏うちへ」——などと仰やつてでも、私をお瞞だましになつていて呉れられなかつたものなのだらうか。

それからだつても、あの方はいかにも何気ないような御顔をなすつて、おりおりお見えにはなつたが、それすらだんだん途絶えがちになり、そのうちにその堪え難いほどだった冬も過ぎ、漸つと春が立ち返つて、三月になつた。三日の節句にも、桃の花なんぞを飾りつけてお待ちしていたのにととうとお見えにならなかつた。近頃姉のもとへしげしげとお通いになつて来るいまひと方も、いつもはそんな事など一度もなかつたのに、その日だけはどうしたわけか、お見えにならずにしまつた。が、その翌日、御ふた方とも打揃つてお見えになつた。ゆうべから待ち侘びていた女房どもが、そのままにしてしまうのも何だからと云つて、きのう飾つてあつた桃の花を再び取り出してきたので、その花の一と枝を折つて手にすると、それはもう少し萎れかかつていた。私はそれを見るとつい胸が一ぱいになつて、それに手習でもするよな気で「待つほどのきのふ過ぎにし花の枝はけふ折ることぞかひなかりける」などと書き散らしていると、それをいきなりあの方が奪いとられ、その枝をかざしながらお読みになつて、「何だ、この歌は。お前とは一生をかけて誓つているのじやあないか。こんな一年毎に咲く花なんぞとはお前が違つているのを知らないのか」などと、いつもの真面目とも常談ともつかないような調子で、私をお虐めなさるのだつた。

その事がいつか姉のもとに来て入らしたいまひと方の御耳にもはいったと見え、「私もゆうべはわざと余所よそで過して来ました。花があるので好んでこちらへ来ただけなのだろうなどと言われそうでしたから」などと、そのお方までがしたり顔にそんな事を言つてよこされた小憎らしさ。

それからまだ二た月とは立たないうちに、私はいつのまにやら只一人で起き臥しする事の多いような身の上になりながら、姉の方へばかり絶えずいまひと方が出這入ではいりなすつていられるのを、胸のしめつけられるような気もちで見て暮していたところ、五月になると、そのお方さえも、まるでそう云う私をお避けなさりでもするかのように、余所へ私の姉をお連れして往つてしまった。それから私はほんとうの一人ぎりになってしまったのだつた。——が、こう云うはかない身の上になったのは、私ばかりではなく、私なんぞよりもずっと前からあの方がお通いになつて、お子様などもたんとおありなさると云うお方のもともへも、この頃は全くあの方は絶えられているとお聞きして、ましてどんなにお心細い事だろうかと、おりおり消息などをさし上げては自分でもわずかに気を紛まぎらわせようとしていた。が、おとなしそうなそのお方は、なぜか知ら（或は私だけが別して人の苦しみとい

うものを過当に見るようなところがあるのだろうかしら)、いつも私の相手になるのをお避けになるような素気ない御返事しかおよこしにならなかった。誰もかもみんなそういう私をお避けになつたと見える。

そのうちに六月になつた。月初めからずっと長^{なが}雨^{がさめ}が続き、此頃はとりわけてあの方もお見えにならなかつた。

これまでだつたらこんなことは無かつたのに、どうしたのか、私はまるで心が空虚^{うつろ}になつて、そこいらに置いてあるものさえ静かに見られない癖がついてしまつていた。「こんな風にしてあの方は私とお絶えなさるおつもりなのかしら。そうだとすれば、何かあの方の事を自分に思い出させてくれるようなものは残っていないかしら」なんぞと、そんな事まで考え出しながら、あの方がこうしてお離^かれになればなるほど、あの方に対してついぞいままで覚えのなかつた位にお慕わしさのつて来るような自分をば、自分でどうしようもなくしていた。すると十日ばかり立つて、あの方から珍らしく御消息のあつたのを読んでいると、何くれとお書きになつて、最後に「帳^{とばり}の柱に結わえて置いた小弓の矢を取つてくれ」と言われるので、まあ、あの方のこんなものが残つていたのにと、やつと気がつき、

それを取り下ろして持たせてやるような、悔やしい事さえもあつた。

そんな風に、あの方がますます私からお離れがちななつていられる間も、私の家は丁度あの方が内裏うちから御退出になる道すじにあたつていたので、夜更けなどに屢しばしばあの方が私の家の前をお通りすぎなさるらしいのが、折から秋の長い夜々のこととて、ともすれば私は目覚めがちなものだから、いくら聞かまいと思つていても、手にとるように耳にはいつてくる事がある。そんな時などには「何とかしてあれだけは聞かずにいたいものだが——」と思ひながら、しかもその一方では、いましがた私の家の前をつづけさまに咳しわぶきをなさりながらお通りすぎになつたあの方が、だんだんその咳と共に遠のいて往かれるのを、何処までも追うようにして、私は我知らず耳そはだを側立てているのだつた。……

その二

それから十年ばかりと云うもの、私の父はずつと受領ずりようとして遠近おちこちの国々へお下りになつていた。たまさかに京へお上りになつても、四五条のほりにお住いになるので、一条のほりにあつた私の家とは大へん離れていた。それで、こうやって私たちが人少なに

住んでいた家は、誰も取り繕とつくろつてくれるような者なんぞ居なかつたので、次第次第に荒れまさつて来るのを、私はただぼんやりと眺めながら、漸ようやく成長して来る道綱一人を頼みにして、その日その日をはかなげに暮しているばかりだった。

そのうちにやつとその幼い道綱が片言まじりに物が言えるようになって来たが、それもいつ聞き覚えたのか、あの方がいつもお帰りの時に、「そのうちに又——」などと仰おつしやつて出て往かれるのを、「又ね……又ね……」などと口真似をして歩きまわったりしているのだった。——そのようなわが子のあどけない姿を見て覚えすほほ笑まされながらも、どうしてまあこうも自分はこんな幼な子の無心の振舞の中にすら、それに写る自分の悲しみをしか見出せないのだろうかと歎かずにはいられないのだった。

こういう私たちの日頃の有様を御覧になつても、あの方は一向無頓著むとんじゃくそうに、たまにお出いでになつたかと思うと、又すぐお帰りになつて往かれた。大かた私たちが心細がつているだろうとさえもお思いにはならないものと見える。いつも云いわけがましく「この頃は為事しごとが多いので——」などと仰やつては入らつしやるけれど、まあちよつとでもこれに目をお留めなすつたら、この数知れぬほどな蓬よもぎよりもまさかお為事が多いとは仰やれまいにと、私はわが家の荒れ放題になつた庭をいまさらのように見やつては、少し自嘲的な気持

にもなつて、それがますます荒れ果てるがままに任せておいた位だった。

そんな私に向つて、「まだお若い身空ですのに、どうしてそのようにばかりして入らっしゃるのですか」と気づかつては、熱心に再婚などを勧めてくれる人もあつた。それだけに、あの方はまたあの方で、「おれの何処が気に入らないのだ」と云つた顔つきをなすつて、少しも悪びれずにいらつしやるので、本当にどうしていいのやら、私は思いあぐねるばかりだった。何んとかしてこの胸に余る思いをつぶさにこの人にも分からせようがものはないかと思えば思うほど、私はあの方に向つては一ことも物を言うことが出来ずにしまふのだった。

「今のようにときどき思い出されたように入らつしやるよりか、いつその事もうすつかりお絶えになつて下すつた方がどんなに好いか知れやしない」などとまで私はその日頃考え出していたものだった。又意地の悪い事にはそんな時にかぎつてあの方がひょっくりお見えになつたりする。「どうして私のところへなぜ入らつたのですか」と云つた顔をしたぎり、私が何も言わずにいるものだから、あの方も何だかひどく工合悪そうにしていらつしやる。まあ、折角こうしてお出になつていられるのだから、こうばかりしていても、つい弱気になろうとする自分を、私は一生懸命に抑えつけて、あの方がいかにも物足らな

そうにお帰りになるがままにさせている。……

そんな事ばかり繰り返しているうちに、とうとう或日などはあの方もすっかり気を悪くされた見え、つと端はしの方へ歩み出されてから、幼い道綱をお呼び出しになって何か耳打ちをなすつていらしたたが、そのままいつにない怨み顔うらがをなされて出て往かれてしまった。あの子ははいつて来るなり、私の前でしくしく泣いている。「どうしたの」と尋ねて見ても返事もせずにはいた。あの方にきつとおれはもう来ないぞ、とでも言われたのだろうと思つて、それ以上尋ねるのは止めて、いろいろ慰めたり賺すかしたりしていたが、それから何日たつても、あの方からは音信おとずれさえもなかった。「まさかと思つていたのに、本当にこのままお絶えなさる気なのかしらん」と不安そうに思いながら、それでもまだそれを半ば疑うような気もちで暮らしていると、或日の事、こないだあの方の出て往かれる時に鬢びんを洗いになった汗ゆすぶる 坏つきの水がそつくりそのままになつてにふと気がついた。よく見ると、その水の上にはもう一面に塵ちりが溜たまつていた。「まあ、こんなになるまで——」と私は胸をしめつけられるような心もちで、それに何時までもじつと見入っていた。——そんな事さえも、その日頃にはとかく有りがちなのであつた。

そういう一方に、あの坊まちの小路の女のところで子供が生れるとか言つて大騒ぎをしていたらしかつたが、その頃からどう云うものか、あの方はあんまりその女のもとへはお出いでにならなくなつたとか云う噂だつた。その女の事を憎い憎いと思いつめていた時分に「いつまでも死なせずに置いて私の苦しみをそっくりそのまま味わせてやりたいものだ」と思つていた通りに、すべての事がなつて往きそうだった上、その生れたばかりの子供までが突然死んだと聞いた時には、「まあ何んていい気味だろう。急にそんなになつてしまわれて、どんな心もちがしているかしら。私の苦しみよりかいますし余計に苦しんでいる事だろう」などと考えて、本当に私は胸のうちがすっぱりとした位だつた。——こんな人らしくもない心の中まで此処に書きつけるのは、ちよつとためらわれもしたけれど、こう云うところに反つて生き生きとした人の心の姿が現われているかとも思えるので、この私と云うものをすっかり分つて貰うためには、やはりそう云うものまで何もかも私はこの日記につけて置きたいのである。

さて、そんな事のうちに数年と云うものは空しく過ぎ去つてしまつたが、そう、何でも五月の二つあつた或年の事である。その閏五月うるすには雨が殆ど絶え間もなしに降り続いてい

た。そうしてその月末から、どうしたのか、私は何処と云うこともなしに苦しくつて溜^たまらなかつた。もうどうなつたつて好いと思つて自分の事ではあるし、そんな命をさも惜しがつてもいるようにあの方に見られたくはないと思つて、私は瘦^やせ我慢^{がまん}をしていたが、側の者たちがいろいろと気づかつて、しきりに芥^{からし}子^{やき}焼なんぞという護^ご摩^まなども試みさせるのだけれど、一向その効力はないのだった。——そうやって私がひどく苦しみ続けている間も、あの方は謹慎中だからと言われて一度だつて御見舞には来て下さらなかつた。何でも新しい御^お邸^{やしき}をおつくりなさるとかで、そちらへ毎日のようにお出^{いで}になるついでに、ちよつとお立寄りになつては、「どうだ」などと車からもお下りなさらずに御言葉だけかけていらつしやるきりだった。そんなような或物悲しく曇つた夕暮に、私がすっかり氣力も衰え切つているところへ、そちらからお歸りの途中だといわれて、あの方は蓮の実を一本人に持たせて、「もう暗くなつたので寄らないけれど、これは彼処のだから御覽」とこどづけて寄こされた。私は只「生きていのかどうかも分かりません程なので——」とだけ返事をやつて、そんな蓮の実なんぞは見る氣にもなれずに、そのまま苦しうに臥したきりでいたが、そのような大そうお見事らしい御邸だつて、そのうち見せてやろうなどと仰^{おつし}やつて下すつてはいるものの、こうやつて自分の命のほども分ならず、それにまたあの

方のお心の中だつて少しも分からないしするので、どうせ自分はそれをも見ずにしまう事だろうなどと考え続けていると、その心細い事といったら何んともかとも言いようのない程であつた。

そんな工合に何時までたつても同じような容態だつたので、名高い僧なども呼んでいろいろと加持を加えさせて見たけれど、一向はかばかしくはならずにした。そこでしまいは、事によるとこのまま自分もはかなくなつてしまうのかも知れない、そうなたつて自分の身などは露ほども惜しくはないけれど、只あとに一人きり残される道綱がどうなることか知らん、と私は急にそれが気がかりになつて、或日、いかにも心もとないあの人だけれど、まあそれでもと、苦しいのを我慢しいしい、きようそく脇息きよくによりかかりながら、やつと筆を手にして、遺書と云うほどのものではないが、ともかくもあの方に道綱の事をくれぐれもお頼みし、それからその端に「他の人には言われないうようなおかしな事までいろいろ申し上げましたけれど、どうぞそんな事をもお忘れなさらずにいて下さいませ」などと書き添えていた。がそのうち、知らず識らずしの裡うちに、あの方に対する自分の気もちがいつもほど苦くはなくなつてゐるのに気がついた。そうしてあの方との事で今の自分に残つてゐるものと云つたら、不思議に心もちのいい、殆ど静かな感じのものばかりであつた。恐ら

く、私の身の極度の衰えがそういう静けさを自分の心に与えていたのであるうか。

そうこうしているうちに、六月の末頃からいくぶん物心地がついて来たようで、秋も過ぎ、冬になった時分にはもう大ぶ私も人心地がしてきた。その間に、あの方たちは新築した御邸の方へお移りなつて往かれたが、私だけはやはり思ったとおりに、この儘まま此処にこうしておれば好いと云う事になつたらしかつた。

が、そんなつたらそうなつたで、別にどうと云うこともありはしないのに、やつとかいふ復くし出した私はその頃になつて反つて何だか気もちが落着かずにはばかりいたけれど、十一月になつてから雪がたいへん降つた。そんな雪のふりつづいた頃、どうしたのか、まだ充分に癒いえ切きつていなかつたらしい身うちにめつきりと衰えが感ぜられ、世のさまざまな事、ことにあの方の事なぞが言いようもなく辛く思われた一日があつた。私はその日は日ぐらしそんな雪を眺めたり、又、いつぞやの殆ど死ぬばかりだつたような日々の事だの思ひ出したりしながら、「ああ、雪なんぞだつたら、いくらこんなに積つたつて、やがてまた消えて往つてしまえるのだ。それなのに、私は一生のうちにたった一度の死期をも失つてしまつたような……」などとさえ悔やみ出していた。……

その三

そのうちに道綱も漸く成人して来た。が、その頃の事になると、まだついこの間の事のように何もかも自分に一どきに思い出されてしまうものだから、さてそれを書くようにすると、反って何だか書かずともよいような事までも書いてしまいそうな気がしてならない。

……

先ず思い出すのは、これも書かずともよい事かも知れないが、まあ、思い出すがままに書いて見ると、或年の丁度若苗わかなえの生い立つ頃、——そう、若苗といえは、そんな事であった数日前、私はあんまり所在がないので草などの手入れをさせていたら、たくさん若苗が生えていたので、それを取り集めて母屋の軒端にそっくり植えさせて水なども気をつけてやらせていたのであった。が、その日私が見に往つてみると、それはもう残らず色が変わって葉なんでもすっかり萎れかえってしまっていた。——この頃まるつきりあの方のお見えにならない私の家のものといったら、まあ、こんな軒端の苗までも私の真似をして物思いをする見たいなどと、又してもそんな事を考え出していると、そこへあの方から珍らし

く御文があつた。「いくらこちらから文をやつても返事がないので、はしたなく思われそうだから遠慮をしていた。今日でも伺いたいと思うが——」などと書いてある。御返事は上げまいと思つたが、側の者たちにかれこれ言われて、私はやつとそれを書いて持たせてやった。それからすぐ日が暮れた。まだそれが行きつかないだろうと思う時分に、あの方が行きちがいにお出になつてしまった。皆に「何かわけがあたりなのかも知れません。何気ないようにして御様子をごらんなさいませ」などと言われて、私も少し気をつけていたが、あの方は「物^{もの}忌^いばかり続いていたので。もう来まいなどおれが思うものか。どうもお前がすぐそうひがむのが、おれにはおかしい位だ」などといかにも裏もなさそうに仰るので、こちらは何だか気の抜けてしまふ位だった。「明日は用事があるから、又明日でも——」などと仰やつて歸つて往かれたけれど、私もそれを本気にはしないもの、若^もしかしたらと思ひ返しているうちに、だんだん日数が過ぎて往くばかりだった。

やはりそうだったのかと気がつくにつけ、前よりも一そう心憂く思われて、相変らず自分の思いつづけている事といつたら、仏にお祈りしてでも何とかして死にたいものだと言ふような事ばかりだったが、あとに一人残る道綱のことを考えると、それも出来そうもないのだった。「お前が早く成人して、安心の往けるような妻などに預けてしまえたら、ど

んなに好いだろうに。いま、わたしが死んだら、どんな思いをしてお前が一人でさすらう事だろうと思えば、ほんとうに死ぬのも死にくい。まあ、形かたちでもかえて、世を離れたらと思うのだけれど——」と私が独言でも言うように言っていると、まだ深くは何もわからぬらしいが、あの子も悲しそうに「そうおなりになったら、まろも法師になりとうございませす。この世に交わって居りまして、何になるでしょう」と言いながら、目に涙を一ぱい溜めている。私はそれを見ると、やつと気を取りなおしながら、いまの話はなしを常談にしてしまおうとして、「そうなつて鷹も飼えなくなれたら、どうしますか」と言うと、道綱はいきなり立ち上つて往つて、自分の飼つていた鷹を籠かごから出して矢のように放してしまつた。それを傍で見ていたもので泣き出さないものはなかつた。

丁度その暮がたに、あの方から御文が来た。また天下の空そらごと言ことだろうと思えるので、気強く「只今は心もちが悪うございますので、いずれ後ほど——」とそのまま使いの者を返させた。そんな事もあつた。

七月、——お盆が近いので何かと世間では騒ぎ出していた。毎年母の盆ぼに供にの事だけはあの方が几帳面きちょうめんになさつて下すつていたのに、今年はどうなるのやら。もうあの方も私か

らお離れわかになったのかと、亡き母も地下で悲しくお思になるかも知れない、しかしまあ、もうすこし待って見ようと思つていたところへ、何時ものようにちゃんと盆供を調べて下さつた上、御文まで添えてあつた。私はそこで「亡くなつた人の事はお忘れでないと思えます。しかしわたくしの事などは——いいえ、こんな果敢はかない身の事などは、本当に自分でも忘れられたら忘れてしまいたい位なのですものを」と例によつて少しひねくれて書いてやつた。

やがて相撲すまいの頃になつた。もう十六になつた道綱みちつながしきりにそれへ往きたそうにしてるので、装束しりをつけさせて、先ず殿のもとへと言いつけて出してやつた。その夕方、あの方が車の後へでも乗せて送つて来て下さるかと思つていると、他の人に送られて来た。その次の日も道綱は出かけて往つたが、夕方、また雑色ぞうしきなどに送られて来た。子供心にもいつもなら御一緒に送つて下さるものをと、そうやって一人ぼっちで帰つて来るのがどんな思ひであらうに。……

ところが、八月にはいつて、或日の夕方、突然あの方がお見えになつた。「明日は物もの忌いだから門を強く鎖とぎしておけ」などとお言いつけになつて入らっしゃるらしかつた。私はもう物も言われない位、胸が沸き立つような気もちがしていると、あの方は道綱をお側

に引きよせられて、そんな私の方をちらつと見やつては、何かひそひそと耳打ちしていらしっていた。「我慢をしておいで」なぞと囁ささやいているのが、ふと私の耳にも入ったりする。しかし私はどうにもしようがなしに、黙ったまま向き合っていた。翌日も、一日中あの子をお側に置かれて、「おれの心もちはちつとも変らないのに、それを悪くばかりとるのだ」などとお聞かせになつて入らつしやるらしかつた。

それから、どうした事やら、不思議なほどあの方は屢しばしばお見えになるようになった。この頃急に大人寂おとなさびてきたような道綱があの方のお心をも惹ひいたものと見える。それはあの方が何時おとになくいろいろとあの子の御面倒を見て下さつて、今度の大賞だいしょうえ会には何か禄ろくを給たまわらせよう、それから元服もさせようなどと、仰おつしやり出しているのでも分かるのだった。私までも一と頃はいささか昔に返つたような気もちになりかけていた位だった。

が、道綱の元服もどこおりなく果てたかと思うと、またしばらく例の御物忌とやらでお見えにならないようになった。毎日のように、道綱は内裏うちに一人で出て往つては、また一人で淋しそうに帰つてくる。そんな或日の事、あの方が「きようは往けたら往こう」などと御消息を下すつたので、もしやと思つてお待ちしていたが、その夜も空しく更けて往くばかりだった。やがて気づかつていた道綱だけが、ただ一人で浮かない顔をして帰つて

きた。そうして「殿も只今御退出になりました」などと語るのを聞いて、いくら夜が更けていたって昔ながらのお心さえおありだったならばこんな事はなさるまいに、と私は胸が潰れるつぶような思いがした。それから、また、以前のように、音沙汰がなくなってしまうていた。

やっと十二月になって、七日頃にあの方がちよいとお見えになった、何だかもう顔を見られるのも不快なので、几帳をよせて、その陰に引きこもっていると、お出いでになったばかりなのに、「日が暮れたな。どれ、これから参内せねば——」と仰おほやってお帰りになられたがり、音信おとずれもなくて、十七八日になった。

その日の昼頃から、雨がそんなに強く降ると言うほどではなしに、ただ何となく降りつづいていた。こんな日なんかには若もしやと云うほどの気にさえなれず、私はしようことなしに昔の事などを思い出しながら、昔の自分が心待ちにしていたすべての事と今の自分とは何と云うひどい相違だろう、あの頃はこんな雨風にだって御いといなさらぬものをと自分自分は信じていたのに、なんぞと考え続けていた。しかしいま、こうやってしみじみと思い返して見ると、その頃だつて自分はちつとも気の緩ゆるむような心もちのした事なんぞはつい

ぞ無かつたようにも思われた。これと云うのも、一体、以前から自分の心が驕おごっていたのだらうかしらん。ああ、こんな事になるなんて自分は夢にも思わなかつたものを。それほどまで私は大きな夢を持ちつづけていたのに。……

そんな雨がそのまま小止みなしに降りつづいていくうちに、やがて灯ともし頃となった。

南みなみ面おもてには、この頃妹のところへお通いになって来られる御方がある。足音がするようだから、きつとその御方がおいでになったのだろう。私が「まあ、こんな雨だのによくいらつしやるわね」と自分の沸き立つような心を抑えつけながら、独言のように言うと、私の前に坐っていた古女房が「昔の殿でしたら、これ以上の雨にだって、御いといなさらずにいらしたものですのに」とすこし泪なみだぐんで応えた。私はじつと無言のままでしたが、そのうちにふいと何か熱いものが頬を伝い出したのに気がついて、覚えす「思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにぎりける」と口を衝ついて出たままを口の中で繰り返し繰り返していった。そうしてとうとうその儘まま、そんな臥所ふしどでもない所で、私はその夜はまんじりともせず^に過ごしてしまつた。

その四

去年の春、呉竹を植えたいと思つて人に頼んでおいたら、それから一年も立つたこの二月のはじめになつて漸やつと「さし上げますから」と言つてきた。「いいえ、もう少しも長らえたいとは思えなくなりました此の世に、何でそんな心ないような事をして置けましよう」と私がことわらせると、「まあ、大へん狭いお心ですこと。あの行基ぎよき菩薩ぼさつは行末の人のためにこそ、実のある庭木はお植えなされたと申すではありませんか」などと言ひ添えて、その木を送つてよこしたので、つい私もそれに気もちを誘われるがままに、「そう、此処はこの上もなくふしあわせな女の住んでいた所だと、見る人は見るがいい」と思つて、胸を一ぱいにさせながら、それを植えさせた。

それから二三日して、雨がはげしく降り、そのうち東風までも吹き加わつて来たので、あの呉竹はどうなつたかしらと思つて見やると、もうそれは二三本傾いてしまつていた。早く元のようにしてやりたいと思ひながら、雨間あままを待つているうちに、しかしこう云う自分だつて、何時その行末はこんな思いがけないような事になるかも知れないのにと、またしても例の物思ひをし出そうとしている自分に気がつくつと、私はもうそんな自分をば勝手に一人で苦しませるために、さつきの呉竹がますます傾き出しているのを、わざとその

ままにさせて置いた。

この頃あの方はずっと近江とか云う女のもとへお通い詰めだと云う事をお聞きしていた。そんな或日の事、あの方から珍らしく御消息があつて「私の心の怠りでもあるが、いま忙しい事も忙しいのだ。夜分でもと思うけれど構わないか。何だかお前が怖いような気もするが——」などと書いておよこしになった。私は「只今気分が好くありませんので何も申し上げられません」と素っ気ない返事をやったが、そのすぐ跡からそんな返事をやった事でもって自分から絶え入るような思いをしていると、その夜、あの方はいかにも平気そうな御様子をなすつてお見えになった。ほんとうに悔やしいと思つて口も利かずにいると、あの方は悪びれもせず常談ばかりお言いになつていらした。それが私にはとても辛くて、とうとうこの日頃ずっと我慢しつつづけていた事をお訴えし出していると、そのうちにあの方は何とも御返事をなさらなくなつてしまつた。そうしていつの間にかもう寐ね入つてしまわれたようだったので、私は急に気抜けがしてそのまま黙っていると、その時ふいとあの方は薄目をお開けになつて、そう云う私に「どうしたのだ。もう寐ねてしまつたのか」と意地悪そうにお笑いかけなすつた。けれども、私はもう石のように押し黙つたぎ

り、そのまま夜を明かしてしまったので、翌朝あの方は物もお言いにならずにお帰りになられた。

それから二三日するかしないうちに、あの方は何事もなかったかのように、例の縫物などを持って来させて、「これを仕立ててくれ」などと言っておよこしになった。が、私はそれには手もつけずに、そっくりそのままそれを返えしてやった。

三月も末近くなつてから、父が京に上つて来られたので、私はあんまりこうして暮してばかり居ても息苦しくつて溜たまらなかつたし、それに忌いみも違たがえがてら、しばらく父の所へ行くことにした。そちらで、この間から思い立っていた長精進もはじめようかと思ひ、いろいろその支度をし出しているところへ、あの方から御文があつた。相変らず「勘当は未だなのか。もう許してくれるなら、暮方にでも往きたいがどうだ」などとある。私がそのまま返事を出さずにいると、人々がそれではあんまりだと言つてうるさいので、「二た月もお見えにならなかつたのに、不思議な御文ですこと」とだけ返事を書いてやった。少しでも早く静かに落着きたいと思うので、急いで父の家へ引き移つて往つた。月のない空に、夜まで一そう更けまさつて見えた。いつものように私の胸の中は沸きたぎるようだったけ

れど、父の家は手狭でもあったし、生憎人もごたごたしていたので、息もろくにつけずに、胸に手を置いたような、重くろしい気もちでその夜は明かした。

思つたとおり、あの方からはそれつきり何の音信もなかった。

四月にはいると、道綱を側に呼んで「お前も一しよにおし」と言つて、いよいよ長精進を初めた。と云つても別にものものしくはせず、ただ脇息きょうそくの上に香を盛つた土器かわらけを置いたぎりで、その前で一心に仏にお祈りした。その祈る心も只「大へん私は不為合ふしあわせでございました。昔から苦しみばかりの多い身でございましたが、この頃はほんとうにもう生きてゐる空もない程でございます。どうぞ思い切つて死なせて、菩提ぼだいをかなえさせて下さいませ」などとばかりで、少しさしぐみながらお勤を続けていた。

ああ、一昔前、此頃は女だつても数珠ずずをさげ経を手にしていない者はない位だと人々の語るのを聞き、「そんな尼のような御顔をなすつていらつしやるから寡やもめにおなりになるのでしよう」などと非難めいた事まで言つた、その頃の自分の心は何処へ行つてしまったのやら。そんな事を私が言つていたのを聞いた人々がもしいまの私を見たら、こうして明け方から日の暮れまで倦たゆまずにお勤しているのを、まあ、どんなに笑止に思うことだろう。

こうまで果敢ない人生をどうしてあんなに気強い事が言えたのかと、いまさらながら昔の自分のそんな無信仰が悔やまれてならないのだった。

そうやって二十日ばかりお勤をしつづけている間に、私は夜分になると何だか苦しいような夢ばかり見せられていたが、或晩などは、私はそんな夢の中で、腹のなかを這いまわっている一匹の蛇のために肝を食べられていた。——あんまり恐ろしかったので思わず目を覚ましたが、それからまた私がうとうとしかけると、また夢でもって、それを癒すには顔に水を注ぐが好いと、何人とも知れずに教えてくれた。

そんな夢の吉凶などは自分にはわからないけれど、こうやって此処に記して置くのは、このような私の身の果てを見聞くだろう人が、夢とか仏などは果して信すべきか否か、それによって決めるがよいとも思うからである。

五月になってから、私は物忌も果てたので、自分の家へ帰った。私の留守の間、すっかり打棄らかしてあつたので、草も木も茂るがままに茂っていたところへ、程もなく長雨になつてしまったものだから、前よりも私の家は一そう鬱陶しい位であつた。雨間を見ては、お勤の暇々に、私も少しずつ手入れをさせ出していたが、そんな或日の事だつ

た。私の家の方へあの方のお召車らしいのがいつものように仰々しく前駆させながらお近づきになって来られた。丁度その時私はお勤をしていたところだった。人々は「殿がいらしたようだ」などと騒ぎ出していたが、どうせいつものようなのだろうと思いはしたものの、私も胸をときめかせていると、やつぱりあの方は私の家の前はそのままお通り過ぎになつてしまわれた。皆はもう物も言えずに、ただ顔と顔とを見合わせているばかりらしかつた。私だけは何気なさそうに、さつきから止めずにいたお勤をなおも続けているようなふりをしていたが、しかし心の中には何かいままでについて覚え事のないような、はげしい怒りにも似たものを湧き上がらせていた。――

六月の朔ついたちの日、「お物忌のようですから」と門の下から御文をさし入れていった。おかしな事をすると思つて、披いて見ると、「もうそちらの物忌も過ぎただろうに、何だつていつまで余所よそへ往つていなのだ。どうもわかり難そうなので、つい伺わずにもいるが。――こちらの物もの詣もうでは穢けがれが出来たので止めた」などと書いてある。こちらへもう私の帰つて来ている事を今までお聞きにならずにいる筈はないと思われるので、一層腹が立つてならなかつたが、やつとそれを我慢して、「こちらにはずっと前から帰つておりました。

そんな事なぞどうしてあなた様にお気づきなされましようとも。わたくしの知った所なんぞとは違つた、思いもつかないような所へしじゅう御歩きなされていらつしやるのでしようから。——何もかもみな、今まで生き長らえている私の身の怠りなのですから、いまさら何も申し上げようもござりませぬ」と返事を書いて持たせてやった。

本当にこんな風にとどき思い出されたように何か気安めみたいな事を言つて来られたりなんかすると、反つて私には辛くつてならない。不意にでもあの方の方にやつて来られて、またこの前のように侮やしい事もないとはかぎらない。こんな私なんぞは、いつその事これつきり何処かへひそかに身を引いてしまつた方がいいのではないかしら。——「そう、それがいい、——そうだ、西山にはこれまでもよく往つた寺があるけれど、あそこへ往つて見よう。あの方の御物忌のお果てなさらぬうちに——」と私は突然思い立つなり、一日も早くと思つて、四日の日に出かけることにした。

丁度その日はあの方の御物忌も明けるらしいので、気ぜわしい思いで、いろいろ支度を急がせていると、人々が上うわむしろ蕙うわむしろの下から何か見つけ出して「これは何でしょう」などと言ひ合つていた。ふと見ると、それはいつもあの方が朝ごとにお飲みなすつていた御薬が檀たとうがみ紙がみの中に挿まれたままになつて出て来たのだった。私はそれを受け取つて、その紙

の上に「所詮生れ変らねばと思つては居りますけれど、何処ぞあなた様がわたくしの前を素通りなされるのを見ずにもすむような所がござりましようかと存じまして、今日参ります。ああ、また問わず語りをいたしてしまいました」と書きつけ、その中に元のように御薬を入れて、道綱に「もし何か訊きかれそうだったら、これだけ置いて早く帰つていらつしやい」と言いつけて持たせてやった。

それを御覧になると、余程あの方もお慌てなされたと見え、「お前の言うのも尤もだが、まあ何処へ往くのだから知らせてくれ。とにかく話したいことがあるので、これからすぐ往くから——」と折返し書いておよこしになった。それが一層せき立てるように私を西山へと急がせた。

その五

山へ行く途中の路はとり立ててどうと云うこともなかつたが、昔しほしほここへあの方とも御一しよに来たことのあるのを思い出して、「そう、四五日山寺に泊つたことのあるのも今頃じゃなかつたかしら、あのときはあの方も宮仕えも休まれて、一しよに籠こもつて入ら

しつたつけが——」などと考え続けながら、供人もわずか三人ばかり連れたきりで、はるばるとその山路を辿つて往つた。

夕方、漸つと或淋しい山寺に着いた。まず、僧坊に落ちついて、あたりを眺めると、前方には籬まがきが結われてあり、そこいら一めんに見知らない夏草が茂っていたが、そんな中にぼつりぼつり竜胆りんどうがもう大かた花も散つたまま立ちまじっているのが侘わびしげに私の目に止まつた。

湯などに入つてそれから御堂にと思つているところへ、里の方から人が駈けつけて来たようなけはいであつた。留守居の者の文を急いで持つてきたのだつた。読んで見ると、私の出かけた跡にすぐ殿からお使いの者が見えて私を引き止めるようにと云いつかつて参つた由、留守居の者が私の出立しゅつたつの模様やそれから日頃の有様などを精くわしく話して聞かせると、その男までつい貰い泣きをし、「ともかくもその事を殿に早くお知らせ申しましよう」と急いで歸つた由、——やがてそちらへ殿が御自身で御迎えに往かれる事になりそうですからその御用意をなさいませなどと細々と書いてきた。あれほど此処へ来ている事をあの方にはお知らせしないようにと固く言い置いてきたものを、あの人達したら何んの考えもなしに、その事ばかりでなく、おまけに有ること無いことまで大げさに話して聞かせ

たのだろう。ああ、何だか物々しい事になってしまいそうな、——と思ひながら、ともかくもそうなたらそれまでと、湯の事を急がせて、御堂に上った。

暑かつたので、しばらく戸を押しあけて眺めやっていたが、此処は丁度山ぶところのようなどころになつて見ると見える。周囲にはすっかり小さな山々が繞めぐつていて、それらが数知れぬような木々に覆われているらしいけれど、生あいにく憎月がないので、殆ど何も見わけられない……

そうやつて戸を押しあけたまま、御堂で初夜しよやを行つているうちに、何時なのだろうかしら、時の貝を四つ吹くほどになつた。そのとき急に大門の方に人どよめきが出したので、巻き上げていた簾みすを下ろさせて透して見ていると、木の間から灯がちらちらと見えてくる。やつぱりあの方は入らしたのだ。

門のところまで、道綱は急いで御迎えに出て往つたらしかつた。やがて戻つてきて、あの方が車にお立ちになつたまま「御迎えにやつて来たのだが、生憎きようまで穢けがれがあるので、車から下りられない。何処かに車を寄せる所はないか」と仰おつしやっていると取り次いだが、私はそれには全然とり合わずに、「何をお考えちがいなすつて、そんな向う見ずな御歩きをなさいます。今宵だけでもと思つてわたくしは此処へ参つて居るのです。もう

夜も更けておりましよう。早くお帰りなさいませ」と返事をさせた。それからそんな文の往復を何度となく為合しあった。一丁ほどの石段を上ったり下りたりしなければならぬので、それを取り次いでいた道綱は、しまいには疲れ果てて、ひどく苦しそうな位にまでなつた。その上、殿が、これ位の事がとりなせないのか、腑甲斐ない奴だな、などと大へん御気色が悪いと言つて、いかにも切ながつていた。それを見ていた側の者たちはしきりに不便ふびんがつていたが、私は何処までも自分を守り通して拒絶したので、あの方もとうとう「よしよし、おれは穢れがあるからこのままこうしても居られない、車をかけてくれ」と仰やつてそのまま御帰りなさるらしかつた。私が覚えすほつとした気もちでいると、思いがけず、道綱までが、「まろもお送りして往きます。お車の後しりへでも乗せて往つていただきましよう。そうしてもう二度とまろもこちらへは参りませんから」と言い残したぎり、泣き顔をして出て往つてしまった。どんな事になつたつてこの子だけは自分のものだと思つていたのに、まあ、この子まで、何んむじて酷いことを言うのだろうと呆れながら、私はもう物も言えずにいた。が、しばらくして、皆がもう出て往つてしまつただろうと思える時分になつて、ひよつくりと道綱だけが戻つてきた。そうして「お送りいたそうとしましたら、殿がお前はこちらで呼ぶとき来ればいいと仰せになりました」と言うなり、もう溜たまらなくなつ

たように、そこに泣き崩れていた。本当にどういいうお気もちなのだか自分にもわからなかったが、「いくらあの方だってお前までをこの儘まになさりなどするものですか」と言いかしながら、さまさまに道綱を慰めているうちに、いつか時は八つになっていた。こんな夜更けてからのお帰りを皆はお案じしながら、「路も大へん遠いのに、御供の人々も居合せたものだけしかお連れなさらなかったと見え、京の内の御歩きよりも人少なだったようでしたけれど——」などと言い合っていたが、私だけは無言のまま、強いてつれないような様子を見せていた。

しかし夜の明けかかる時分、道綱がゆうべの事をしきりに気にしては「御門のところからでも御機嫌伺いをして参りましようか」と言いつづけているので、少しいじらしい気もし、文をもたせて京へ立たせてやった。「ゆうべはずいぶん向う見ずな御歩きと存じましたが、夜も更けておりましたので、ただみ仏に無事にお送り下さるようにとお祈り申し上げて居りました。それにしても何をお考えちがいなすって入らっしゃるのでしょうか。大へん頭が痛みますので、いまずぐ帰ることも難しいかと思われませんが——」そんな事をなにくれと書いて、その端に、「途みち々みちも、昔御一緒に参ったことのあるのを思い出しなが

ら参りましたが、ほんとうにあなた様の事ばかりお思い申し上げて居るのです。やがてわたくしも此処を下ります」と書き添えた。

道綱を立たせてやつてから、明け方の空をぼんやりと見やっていると、雲だか、霧だか、分からないようなものが、下の方から見る見るうちに涌わいて来て、それが互せめに鬩あぎ合あつてはどちらとへともつかず動かされながら、そこいら一面を物凄あいほど立ちこめ出していた。
 ……

昼頃、京から道綱は帰ってきた。「御留守でしたので御文は預けて参りました」という事だった。そうでなくとも、どうせ御返事はないに極まっていると私は思った。

さて、昼はひねもす例のお勤をし、夜は主のみ仏にお祈りをする。周囲は山ばかりだから、昼間だつて人に見られる氣づかいはなかったので、簾みすなどもすっかり巻き上げさせたぎりだった。——ただ、ときどき思い出したように間近かくの木々から鳥が何やら叫びながら飛び立つのに、覚えずぎくりとして誰か人でもと、あわてて簾を下ろしかけては、漸やつと見知らない鳥が二三羽翔かけ去さつただけなのに氣がつくような事もあった。そんな時など、それほど空うけたようになっておるおりの自分の姿が、私にも何かしら異様に思わ

れたりするのだった。

そのうちほどなく身が穢けがれになったので、私は一度里へとも思ったが、すぐ思い返して、その間だけ寺から少し離れた或みすぼらしい山家に下りている事にした。それを聞きつけて、京から伯母などがやって来てくれた。そんな馴れない山家住いだものだから、何だかちつとも気もちが落着かず、五六日を過しているうちに、もう月の中程になってしまった。山陰の暗いところを螢が小さく光りながら飛ぶのがしきりなしに見えた。里でまだしも物思いの少なかった頃には、ついぞ二声と続けて聞いたことのないのを怨うらめしがった時ほととぎ鳥すも、いまはすっかり私にも打ち解けて、殆ど絶え間もなしに啼ないていた。水鶏くいなだって、わが家の戸を叩いたかと思うくらい近くを啼いてゆく。——それにしても、何んとまあ物思い自身の巢すみくつているような栖すみなのだろうかしら。それは自分から思い立つてこうして居るのだから、誰も訪れてくれる者はなくとも、ちつとも辛いなどとは思ひもしないし、むしろ気安くていいとさえ思つてはいるものの、只、歎かわしいと思うのは、こう云う物思いにもつてこいのような栖をさえ自分から好んでせずにはおられなくなった自分の宿世すくせの切なさ、——それともう一つは、自分の死後に、日頃こうして自分の傍を離れずに長

精進なども共にして頼もしげに見える此道綱が、他には力にすべき人も居ないのでさぞ世間にも出にくいだろう、それにこうして精進している自分と同じような粗末な物をばかり食べさせているので、この頃はよく喉のどにも通らぬらしいのを見るのが自分には辛くてしようがない。——そんな事を考え続けながら、こんな思いを自分もし又子供にまでさせて漸つとこうして自分が気安くしているのかと思うと、遂にはその気安さそのものさえ自分を苦しめ出してくるのだった。ああ、私は一体どうしたらよいのであろうか。……

夕暮の入相いりあいの音、蝸ひぐらしのこえ、それからそれにつれて周囲の小寺から次ぎ次ぎに打ち鳴らされる小さな鐘などをぼんやり聞いていると、何んともかとも言いようのない気もちがされて来るのだった。

身の穢れている間は、一日中、何もすることがないので、端近くに出ては、私はそうやってしまいは自分を言いようもなく苦しめ出すのが知れ切っているような物思ひばかりをしていたのだったが、或夕方も私がそんな端近くでいつまでもぼんやりしていると、後ろから道綱が気づかわしように「もうおはいりになりませんか」と私に声をかけた。子供心にも私に物をあんまり深く思わせまいとするのだろう。しかしもう少しこうして居たい

と思つて、そのまま私がじつとしていると、再び道綱が「何だつてそんな事をなすつて入らつしやるのですか。お体にだつてお悪くはありませんか。それに、まろはもう睡かつてたまりませんから」と言いかけるので、私はついそんな子供にまで、まるで自分自身に向つて言いでもするようになり、「お前の事だけが気になつて、こうして長らえているのだけだ——」と言ひ出した。「どうしたら好いのだろうね。尼にでもなつたら一番好いのかしら。この世に居なくなつてしまふよりか、それでも生きていたら、お前にしたつてお母あ様の事が気にかかればすぐ会いにも来られるし、それでいてあととはもうこの世に居ないものだと言ひめてもいられるでしょう。——そうやって尼になつたつて、お前のお父う様さえ本当に頼りになるのなら、お前の事は少しも心配は入らないのに、それがどうにももどかしいような気がするのです、こうやつて物思ひばかりしているのだけれど……」と、ひとりごとのように言い続けているうちに、ふとこんな言葉が、かわいそうに、此の子をどんなに苦しめているのだらうと気がついて、私は突然言うのを止めた。思つたとおり、道綱はもう返事もできない位、私の背後でやつと泣くのを堪えているらしかった。

五日ばかりで身が浄きよまつたので、また私は御堂に上つた。ずっと来ていて下すつた伯母

もその日お帰りになって往かれた。その車がだんだん木の陰になりながら見えなくなつて往くのをじつと見送つて佇たたずんでいるうちに、逆上でもしたのだらうか、私は急に気もちが悪くなつてひどく苦しいので、山籠やまこもりしていた禅師ぜんじなどを呼びにやつて加持して貰つた。夕ぐれになる頃、そんな人達が念誦ねんじゆしながら加持してくれているのを、ああ溜たまらないと思つて聞き入りながら、年少の折、よもやこんな事が自分の身に起ろうなどとは夢にも思わなかつたので、そうなつたならどんなだろうなどと半ば恐いもの見たさに丁度このよ
うな場合を想像に描いて見たことがあつたが、いまその時の想像に描いたすべての事が一つも違わずに身に覚えられて来るようなので、何だか物ものの怪けでも憑ついて、それが自分にこんな思いをさせているのではないかとさえ私は思わずにいられない位だつた。

それほど、まるで何かに憑かれてもしたかのように、私が苦しみながら山に籠っているのを、京では人々が思い思いにああも言いこうも言つて居るようだし、のみならず、この頃では自分が尼になつたというような噂まで出して居るらしかつたけれど、私は何を言われようとも構わずにいた。それが善いにせよ、悪いにせよ、こう云うような私をそっくりそのまま受け入れてくれるのは父ばかりだと思えたが、この頃は京にいらつしやらない

ので、田舎の方へすぐ便りを出して置いたところ、このほどその父から「そうして居るのも好いと思う。なるべく目立たぬように、暫くでもそうやってお勤をしている分には、氣も安まるだろうから」などと書いておよこしになった。父にだって今の私の苦しい氣もちも殆ど御わかりになつて居そうにも見えないながら、それなりにこそ父のように仰おつしつて下さるのが一番私には頼りになるのだ。それにしても、私がこうして居るところをこの間御覽なすつて歸られたぎり、まだ一度も御消息さえおよこしにならないなんて、まあ、あの方は一体私がどんなになつたならば、私の事をもお顧みになつて下さるのだろうか。そう思うにつけ、私はこれよりもつと深く山に入るような事があるうたつて、どうして里へなんぞ下りるものかと、ますます思いつめて往く一方だった。

或朝、道綱に無理に「魚でも召し上つて入らっしゃい」と言いつけて、京へ立たせてやつた。が夕方近くなつて、もうあの子も帰つてくるだろうと思つていた時分、俄にわかに空が暗くなり、つめたい風が吹きはじめたかと思うと、あたりの木々の葉がさあつと無氣味にざわめき出した。悪いときに夕立になつたなと思う間もなく、すぐもうそこで雷がごぼごぼと物凄いような音を立て出した。——途中でこんな夕立に出逢つて、まあ、どんな思い

をしているだろうと道綱の上を気づかいながら、几帳きちようのかげに小さくなって、私はじつと息をつめていた。おりおり山のずうつと彼方に雷の落ちるらしいのが、そんなに怯おびえた心には、すぐ目のあたりに落ちたのかと思われる位だった。——そんな中でもつてさえ、私はいつの間にか、いつその儘ままこうして自分が死にでもしたら、せめてはそんな痛ましい最後がおりおりあの方に自分の事を思い出させ、そのお心を充たしてくれるかも知れない——などと考え出していたが、しかし私はこうしているだけでさえ怖くて怖くて、顔も上げられずに、いつまでも腑伏うつぶしたきりになっていた。

やがてあたりが薄明くなり出したのに気がついて、私ははっと何かから醒さめたような気もちになりながら、そんなちよつとの間だけ、殆ど忘れ去っていた道綱の事を前よりも一層気にし出していた。それからほどなく、道綱は心もち蒼い顔をしたまま、無事に帰ってきた。「夕立が来そうでしたので、いそいで帰って参りましたが——」と、途中の山路で夕立に逢つた有様を恐ろしそうに話した。

こんどはあの方の御文を托たくせられて来た。「若もしたまたま山を出られる日があつたら前もつて知らせてくれ。迎えに往こう。何だかもうそちらで私の事なんぞはすっかりお見棄てらしいから、こちらから近寄るのはすこし怖い」などとある。私はそれを貧むさぼるように読

んでしまうと、すぐ何でもないようにそれをそのまま打棄てて置いた。

それから二三日後、道綱が「どうか先日のお返事を下さいますか。又お叱りを受けるかも知れませんか、早く持参したいと思います」としきりにせびるのだった。私はもうあの方にそんな返事など上げる気もちにはなれそうもなかったので、何のかのと言い紛まぎらしていたが、しまいには道綱が可哀そうになって、何を書いたのやら自分でも思い出せないような事ばかりを書いて持たせてやった。

すると、又、この間と丁度同じような時刻になると、突然夕立が来た。そうしてこの前よりももつとはげしいかと思えるような雷が鳴り出した。しかし今度は私は、簾みすも下ろさずに、横なぐりの雨に打たれながら木々が苦しみもだえるような身ぶりをしてるのを、ときどき顔をもたげては、こわごわじつと見入っていた。そうして私は、もし自分が本当に苦しむことを好んでいるのだったら、こんなに何もこわがりはしないだろうにと思いかえしながら、だんだん長いことそれを見つめ出していた。ときおりそんな自分の目のあたりを、その稲光りとともに、何処かの山路で怯おびえている道綱の蒼ざめ切った顔が一瞬間ひしゅめ閃いて過よぎつたりするのだった。……

が、そのうちに、私はそれにもめげずに、じつと空中に目を注いだなり、いつか知らず識らずの裡うちに自分自身をその稲光りがさつと浴びせるがままに任せ出してあたかいた。恰もそうやって我慢をしている事だけが自分のもう唯一の生き甲斐でもあるかのように。……

その六

或日の昼頃、突然、大門の方で馬が気もちのいいくらい高くいなな嘶いた。それがどういうわけか、私のうちに言うに言われないような人なつかしさを蘇よみがえらせた。……それからやがて人のおおぜい来たらしい気配がしました。簾を透かして見ていると、立派な装束をした人々も数人見え、それが木の間をこちらへだんだん近づいて来るのだった。その中には関白殿の御子息の兵衛佐ひょうえのすけなどもお見えになつてゐる。先ず、道綱をお呼び出しになつて「これまで大へん御無沙汰申していたお詫わびかたがた、こうやって参りました」と私の方へ取り次がせて置いて、そのまま物静かに木の陰にお立ちになつて居られるその兵衛佐の御様子、何とも言えず奥床しく、京ちかく覚えられる位であつた。

「大へんお懐しいことです、どうぞこちらへおはいりなさいますように」と私はすぐお通

し申させた。すると兵衛佐は勾欄こうらんにもたれて手水などされてから、こちらへおはいりになって入らした。いろいろの物語のついでに「昔わたくしとお会いしたのを覚えていらっしゃいますか」と私になつかしそうに訊きくと「どうして忘れなごいたすものですか、確かに覚えて居りますとも。今こそこう心ならずも疎遠にいたして居りますが——」などとお答えなされて、それからそれへとその昔の事を一しよになって思い出しながら、さまざま物語を続けていた。が、そのうちに私がふいと物を言いかけて、何だか急に声が変わりそうな気がしたので、そのまま少しためらっていると、相手にもそれがおわかりになったものと見える。すぐには物も仰おっしやられずにいたが、やっと兵衛佐は口を開かれて「お声までがそうお変りなされるのも尤もつともの事とは思いますが、もうそんな事はお考えなさいますな。このまま殿がお絶えなされるなんていう事があるものですか。どうしてそう御ひがみなされるのか、私共にはわかりませぬ。殿もこちらへ参つたらようく言つて聞かせてやって呉れなどと仰せられていました」と私を慰めるように言われる。「何もあなた様にまでそう云う御心配をしていただかなくとも、いづれそのうち此処からは出るつもりなのですけれど——」と私がいっになくつい気弱な返事をする、「それなら同じ事ですから、今日お出になりませんか。私共もこのまま御供いたしましょう。何よりもまあ、こ

の大夫がときどき京へ出られては、日さえ傾けばまた山へお帰りを急がれるのを、はたで見えていましても本当にお気の毒なようで——」などと道綱の事まで持ち出して切に口説かれるけれど、私はもう何か他の事でもじつと思いつめ出したように、返事もろくろくしないようになった。そのうちに兵衛佐もとうとうお諦めになったように、しばらくまた他の物語などし出されていたが、それももう途絶えがちで、夕方になると、お帰りになって往かれた。

そういう兵衛佐などにお目にかかるにつけ、ふいと京恋しさを溜たまらないほど覺えたが、それをやつと抑えつけながら、ただお懐しそうに昔物語をし合っただけで、つれなく京へお帰ししてからと云うもの、私が何とはなしに気の遠くなるような思いで数日を過すごしていたところへ、京で留守居をしている人の許もとから消息があつた。「今日あたり殿がそちらへ御迎えに入らつしやるように伺いました。この度もまた山をお出なさらないようですと、世間でもあまり強情のように思うでしょうし、それに後になつてから、もし山をお出なさりでもしたら、それこそどんなに物笑いの種になりますことやら」などと言つてきた。そんな世間の噂なぞどうだつて構いはしないのだ、いくらあの方が御迎えに入らしつたつて、

自分で出たい時にならなければ出やしないから、と私は自分自身に向って言っていた。丁度その日、私の父が田舎から上洛して来たが、京へ著くなりその足ですぐやって来て下すった。そうしてさまざまな物語をし合つた末、父はつくづくと私を御覧になりながら「そうやって暫らくでもお勤をするが好いと私も思っていたが、大ぶ弱られたようだな。もうこの上はなるべく早く出られた方が好いだらう。今日出る気があるなら一緒に出ようではないか。」そんな事を父までがいかにも確信なされるように仰やり出すのだつた。私はそれにはどう返事のしようもなく、まったく一人で途方に暮れてしまっていたが、そういう私にお気づきになると「じゃ、また明日でもやって来て見よう」と気づかわしそうに言い残されたまま、その日は父も急いで下山なすつた。

それから数刻と立たないうちに、大門の外に突然人どよめきがし出した。とうとうあの方が入らしたのだらうと思うと、私はますます一人でもってどうしたら好いか分からなくなつてしまつた。今度はあの方も遠慮なさらずにずんずん御はいりになつて入らつしやるようなので、私は困つて几帳きちようを引きよせて、その陰に身を隠しはしたけれど、もうどうにもならなかつた。其処に香や数珠ずずや経などが置かれてあるのをあの方は御覧なさると

「これは驚いた。まさかこんなにまで世離れていようとはおれも思わなかった。若し^もかしたら山を下りられはすまいかと思つてやつて来て見たが、これでは山を下りでもしたら罰があたるだろう。——どうだ、大夫、お前はこうしているのをどう思っているな」と傍にいた道綱をお振り向きになつて尋ねられた。「大へん苦しゅうございますが、いたし方がござりませぬ」と道綱は打ち伏したまま答えた。「かわいそうに」とあの方は仰^{おっし}やられながら「じゃ、とにかくお前がお母あ様に出ていただきたいと思われるなら、車をこちらへ寄こしてくれ」とお言いつけなさりも果てぬうちに、もうあの方はお立ちになつたままで、そこいらに散らばつていた物なんぞを御自分で取り集められ出した。そうしていつの間にか其処に寄せられたお車の中へそれをみんな入れさせ、それからその居間に引いてあつた軟^{ぜじょう}障^{じょう}までも御はずしになり出していた。

私が呆れて物も言えずにそれを見てみると、人々は互に目食^{めく}わせしたりしながら、笑を含んで、そういう私の方を見守つていらしかつた。「こうしてしまつたら、此処をお出でになるより外はあるまい。まあ、み仏にもよくわけを申し上げると好い、それが作法のようだから——」などと、あの方は事もあろうにそんな常談まで仰やつていた。私はもう一と言も口がきけず、車の支度がすっかり出来てしまつてからも、いつまでもじつと身じ

ろぎもせずに行った。

あの方の入らしたしたのは申の刻頃だったのに、もう火ともし頃になってしまっていた。しかしまだ私がなかなか動きそうにもなかったので「よしよし、おれは先へ往くぞ。あとは、大夫、お前に任せる」と道綱にお言いになって、ずんずん先に出て往かれた。道綱は「早くなさいませ」と私の手をとって、いまにも泣きそうにしていた。こうなってはもうどうにもしようがない、みすみす山を出て行かなければならない私は、自分なんだか他人なんだか分らないようなほどになっていた。……

大門を出ると、あの方も同じ車に乗って来られ、道すがら、いろいろな人を笑わせるような事ばかり仰やっていた。けれども、私は物も言う気にはなれなかった。一しよに乗っていた道綱だけ、ときどき笑を噛み殺しながら、それに内気そうにお答えしていた。はるばると乗って、やっと家に着いたのは、もう亥の刻にもなっていた。

京では、昼のうちから私の帰る由を言い置かれてあったと見え、人々は塵掃いなどもし、遣戸などもすっかり明け放してあった。私は澁々と車から降りた。そうして心もちも

何だか悪いので、すぐ几帳きちようを隔へて、打ち臥ふしていると、其処へ留守居留守居をしていた者がひよいと寄よってきて「瞿麦なでしこの種をとろうとしましたら、根がすっかり無なくなっておりました。それから呉竹呉竹も一本倒たれました、よく手入れをさせて置おきましたのですが——」などと私に言い出した。こんなときに言わずとも好い事ことをと思おもって、返事へんじもせずに居ると、睡すっていられるのかと思おもっていたあの方が耳みみぎとくそれを聞きつけられて、障子しょうじごしにいた道綱みちづなに向むかって「聞きいているか。こんな事ことがあるよ。この世を背そむいて、家を出でてまで菩提ぼだいを求めようとした人ひとにな、留守居留守居のものが何を言いいに來きたかと思おもうと、瞿麦なでしこがどうの、呉竹呉竹がどうのと、さも大事だいじそうに聞きかせているぞ」とお笑わらいになりながら仰うやると、あの子も障子しょうじの向むかうでくすくす笑わらい出でしていた。それを聞きくと、私わたしまでもつい一いっしよになつておかしいような氣きもちになりかけていたが、ふとそんな自分に氣きがつくが早はやいか、それがいかにも自分自分でも思おもいがけないような氣きがしながら「私わたしと云いうものはたったこれこれつきりだったのかしらん」と思おもわずにはいられなかつた。……

その夜も更さらけて、もう真夜中まよなか近くになりかかつた頃頃、あの方が急いそぎにお氣きづきになつたように「どちらが方かたふさが塞ふさりにあたるか」と仰うやられ出でしたので、数かずえて見みると、丁度ちょうど此方こちらが塞ふさがつていた。「どうしようかな」と、あの方もお当惑おたごなすつたように仰うやつて、「と

もかくも、一緒に何処かへ移ろうじやないか」と私をお促しなさるけれど、私は打ち臥したぎり、まあ、こんな事つてあるものかしらと、胸のつぶれるような思いに身を任せながら、しばらくは返事も出来ないほどになっていた。それから私はようやくの思いで口を開きながら「また他の日にいらつしやいませ。ほんとうに方かたがお明けになってから入らつしやると好かつたのですの」と諦め切つたように言った。あの方も、とうとう外にしようがなさそうに「例の面白くもない物もの忌いみになつたか」とぶつぶつ言われながら、真夜中近くをお帰りになつて往かれた。そういうあの方の後ろ姿は、私の心なしか、いつになくお辛そうにさえ見えた。

翌朝、すぐ御文をおよこしになつた。その御文も「ゆうべは夜も更けていたのでひどくつらかつたぞ。そちらはどうだつたな。はやく精進明けをしなさい。大夫も大ぶやつ寢ねれていたようだから」と、いつもに似ずお心がこもっているようだった。こうやってまでして、山から下りたばかりの私をおいたわりになろうとなすつて居られるあの方のお心ばえも、そんな生あいにく憎にくな物忌いみのために、しばらく私からお遠のきになつて入らつしやる間に、又昔のようにつれなくおなりになられそうな事ぐらいは、私にもよく分かつていた。しかし私には、それをそのままに任せて置くよりしかたがないのだった。

その七

そう云うあの方の御物忌のお果てなさる日を私は空しくお待ちしているうちに、やがて七月になったが、或日の昼頃に「やがて殿がお出いでになる筈です、此方におれとの仰せでした」と言つて、侍どもがやつて来た。こちらの者も立ち騒いで、日頃から取り乱してあつた所などをあわてて片付け出していた。私はそれを何かしら心苦しいような思いで見ているが、なかなかお見えにならないままに、日が暮れてしまったので、来ていた侍どもも「御車の装束などもすつかりなすつてしまわれたのに、どうして今になつてもお見えにならないのかしら」などと不思議そうに言い合つていた。そのうちにだんだん夜も更けて往くばかりだったが、とうとう侍どもが人を見せにやると、その使いの男が帰つてきて「今しがた装束をお解きになつて御随身みずいじんたちもお引取りになりました」と告げ知らせた。

その翌朝、道綱が「どうして入らつしやらなかつたのか伺つて参りましょう」と自分から言つて出かけて往つた。が、すぐ戻つて来、「ゆうべは御気分がお悪かつたのださうです、急にお苦しくなられたので、伺えなくなつたと仰やつておられました」と私に言うの

だった。そんなお心の見え透くような御言葉なら、いつそ何にも聞いて来なかつた方がよかつた位だったのに。同じ御返事にしたつて、もつと私の気もちをいたわつて下さるようなお言葉がお言いになれないもののかしら。せめてもの事、「急に差し障りが出来たので往かれなくなつてしまつた。若しか都合がいたらすぐ往こうと思つていたので、車の用意もそのままにさせて置いたのだが——」なんぞとても言つて下されば、まだしも私の気もちも好いものを。

矢つ張自分の思つたとおり、少しはお心が変われるのかなど考えたのはあの時の私の考え過しで、あの方は相変らず以前のあの方だけだったのらしい。そうして私だけが——そう、私は少くとも、あの山から帰つて来てからは、もう昔のような私ではなくなりかけているのだ。……

その日もまた、私がそんな考えをとつおいつし出していたところへ、西の京にお住いになつて居られるあの方の御妹から御文があつた。見れば、まだ私があればからずと山に籠こもつていてるものとばかりお思いになつていらして、何くれと物哀れげに仰おつしやつて「どうしていつまでもまあそんなお淋しいお住いをなすつて入らつしやるのでしょうか。そのようなお住いをも一向苦になさらずにお訪ねいたすお方だつておありでしょうに、つれないあの

人はこの頃あなた様からお離れがちだとか。本当にどうして入らっしゃるかとお大へん気になつて居りますので、ちよつと——」と書いておよこしになった。そこで私はつい今もいま考えていたままに「山の住いはずつと秋までいたそうと思つて居りましたのに、又こうして心にもない里住いをいたすようになりました。——仮りに山に入つても、私のような意気地のない者はまことに中途半端なものでございますこと。だが私も、今度という今度ばかりは本当に苦しい思いをいたしました。しかしそのような苦しい思いも、みんなあの方が私にお与え下さるものとおもえば反つていとしくて、或時などは自分から好んでそれを求めたほどでございました。どうぞこういう言葉を私がただ奇矯ききょうな事を申すようにお思いなさらないで下さいまし。そういうおりおりの空けた私にはどうかいたすと、そんな苦しみが無ければないで、反つて一層はかなく、殆どわが身があるかないかになつてしまいはせぬかと思われる程なのでございますから。——只、それほどまで私にとっては命の糧にも等しいほどな、その苦しみのお値打ねうちにも、それを私にお与え下さつて居る御当人は少しもお気づきになつて入らっしゃいませぬようなのですもの。私はそれをば此頃あの方のために何んだかお気の毒に思つております位。——本当にこんな人並ならぬ気もちさえいたして居りますほどの私の心のうちは、誰やらの申しました『深山みやまがぐれの草』とば

かり思えて、いくら繁くとも誰方もお認めなさいますまいと思つて居ります」と書いて送った。

そう、本当に私はもう昔みたいにあの方のためになんぞ苦しむまいとは思わないが好いのだ。いくらあの方からお離れしようとも、もう自分がお離れできない事はよく私にも分かつている筈だろうから。まあ、こう云つたこの頃の私の切ない心もちと云つたら、あの根を絶たれて、もうすべての葉は枯れ出しながら、しかもまだそのか細い枝は以前のままに他の木の幹にからみついたままである、あの蔓草つるくさに似ているとでも言えようかしら。

その八

それからほどもない或夜の事、思いがけずあの方がひよっくりお見えになった。そうしてこの間の晩の事をしきりに言いわけなすつて、「今宵こそと思つたから、忌違いまたがえに皆が出かけると云うのを出して置いて、おれだけこちらへ急いでやつて来た」などと仰やられていた。しかし私には、そう云うあの方のお心の中がすっかり見え透いてでもいるかのように、あんまり言いわけがましく仰やるのを反つておかしい位に思いながら、あの方

をいかにも何気なさそうにおもてなしをしていた。

そんな自分を自分でもずいぶん昔とは変つたなと思つていたが、流石さすがにあの方にもそう云つた今の私がるで別人のようにお見えになるらしく、それが何時も屈託なさそうにして入らつしやるあの方までを、いくらか不安におさせしているらしかった。しかし、明け方になると、それをただその事の所為せいにでもなさるかのようになり、「勝手の分からぬ所に参つている者共はどうしているだろうな」と仰やりながら、何か気がかりなようになり、お帰りになつて往かれた。

それからまた数日の後だつた。今度伊勢守になられた私の父は、また近いうちに任国へお下りにならなければならなかつた。それでしばらくでも御一緒に暮らしたいと思つて、あの方にはお知らせもせず、私は父と共に或物静かな家に移つた。そんなにまでしたのに、それから二三日した或午頃ひる、急に南面の方が物騒がしくなつた。「誰だろう、向うの格子を開けたのは」と私の父までも驚いて、皆と一しよに立ち騒いでいると、そこへ突然あの方がおはいりになつて入らした。そうしていきなり私の前に立ちはだかつて、いくらか色さえお変えになりながら、傍らにあつた香や数珠ずずを投げ散らかされ出した。しかし

私は身じろぎもせず、どんな事をなされようとも、じつところえながらあの方のなさるがままにさせていた。

そんな心にもない乱暴な事をなさりながら、反つてあの方が私にお苦しめられになっているのが、どうという事もなしに、只、そうやってあの方のなすがままになっているうちに、私には分かつて来たのだった。しかし御自分ではそれには一向お気づきなされようともせずに入らつしやるらしかつた。

それから漸つとあの方は御自分にお立ち返りになられたかと思うと、何だつてそんな事をなすつたのかはよくお分かりにならぬながら、急にいままでの何もかもをほんの一時の御戯れだったとでも云うようになさろうとして、私にいつものような御常談なんぞを言われ出した。私も私で、あの方がかりそめにも私のためにお苦しめられになったなどと云う事をあの方にはお分かりにならせぬのが、せめてもの私の思いやりでもあると云つたように、さも何事もなかつたようにしていた。しかしあの方はまだ何かがお気になる見え、御常談もいつもほど思うようには仰やれずにいらした。

それからその夜は、あの方は私といつになくお心をこめてお語らいになられ出した。私はといえ、そんな事ももう別に嬉しいとは思わずに、只、何もかもすっかりあの方のな

さるがままになっていた。そうしてあくる朝になって、やっと平生のいかにも颯爽さつそうとしたお姿に立ち返えられながら、お帰りになって往かれようとなすっているあの方の後ろ姿を、突然、胸のしめつけられるような思いで見入りだしているのは、いつか私の番になっていた。……

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出：「改造」

1937（昭和12）年12月号

初収単行本：「かげろふの日記」創元社

1939（昭和14）年6月3日

※底本の親本の筑摩書房版は、創元社版による。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房、1977（昭和52）年8月30日、解題によ
る。

入力：kompass

校正：松永正敏

2004年2月27日作成

2012年4月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かげろうの日記

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>